

# 序

今回、研修医の先生がよく出合う Common Disease にフォーカスをあてたステロイドの使い方について企画をさせていただいた。

編集部には、研修医の先生から、ステロイドは使用したことがあるが、疾患や病態によって投与量や減量方法、治療の位置づけが異なり、「何を根拠に投与量を決めればよいかわからない」、「減量する際の考え方が難しい」、「なんとなく使用している」という声が多く寄せられているそうである。当院の研修医からは、「ステロイド使用中の患者さんを診るうえで何を注意してよいかわからない」といった意見が聞かれる。

合成グルココルチコイド (synthetic glucocorticoid)、通称ステロイドは、1948年に関節リウマチ患者にはじめて使われてから約70年になる。その間、さまざまな新薬が開発され、淘汰されていくなか、紆余曲折ありながらも現在も Common Disease から稀な疾患まで日常臨床でよく使用されている。一方で、さまざまな種類があり、正確な作用機序が不明な点、使用量や減量方法の evidence に欠く点、多岐にわたる副作用の存在、各疾患治療における位置づけが不明瞭な点などから、70年前から使用されているにもかかわらず上記のような声が多く寄せられるのではないだろうか。

ステロイドに限らず薬物全般に言えることだが、ステロイドを使用する、もしくは使用されている状況で診療に当たる際、以下の原則を念頭に入れていただきたい。

- ・どこまでわかっている (evidence があり)、どこからわかっていない (evidence が ない) か、理解すること
- ・“何 (どんな病態・疾患)” に対して、“どのような目的 (抗炎症・免疫抑制・ホルモン補充)” でステロイドを使用するか、もしくは使用されているかを把握すること
- ・ステロイドを使用するメリットとデメリットの双方を考慮し、デメリットが最小になるよう努めること

研修医の先生のステロイドに関する日々の疑問に答えるべく、上記原則ならびに、臨床現場での実用性を意識し、「ステロイドの原理原則」・「ステロイドに関するトラブル対応」・「研修医が知っておきたい疾患別ステロイドの使い方」の3章に分け、私が尊敬する卒後10年代の新進気鋭の先生方に解説いただいた。

## ・第1章「ステロイドの原理原則」

ステロイドがつくられた歴史や、種類・薬物動態・作用機序や量について、解明されている部分と解明されていない部分を明確に示しつつ、実際の使用方法とリンクするように解説いただいた。

## ・第2章「ステロイドに関するトラブル対応」

ステロイド使用中の患者さんを診るうえで何に注意したらよいかわかるように、よくある副作用などステロイドに関するトラブルとその対応・注意点・予防策を、日々筆者の先生が実践している患者さんへの説明も交え、解説いただいた。

## ・第3章「研修医が知っておきたい疾患別ステロイドの使い方」

Common Diseaseの中から、研修医の先生への聞き取りで挙がったステロイド使用に困る疾患を取り上げた。一部、ステロイドが治療のメインにならない疾患も含まれるが、治療におけるステロイドの位置づけを明確にする意味合いも込め、解説いただいた。

この増刊号が、研修医の先生の救急・一般外来・病棟での診療に少しでも役立てば幸いである。

2021年5月

諏訪中央病院 リウマチ膠原病内科  
蓑田正祐